

十九世紀末におけるモンゴルと漢族関係の一側面：
清代地方史『靖辺県志稿』がえがくモンゴル

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00000432 |

十九世紀末におけるモンゴルと漢族関係の一側面 —清代地方史『靖辺県志稿』がえがくモンゴル—

楊 海 英

目 次

はじめに

一 表現上の意識変化—套虜から蒙古へ

1.1 『靖辺県志稿』の概要

1.2 沿革認識—北方遊牧民と対峙の歴史

1.3 長城要塞の名称

1.4 駅站制度

二 境界認識と漢族の入植

2.1 境界認識

2.2 中外和耕という入植

三 入植地の「物産」とモンゴルの風俗習慣

3.1 モンゴル物産への依拠

3.2 漢族がみたモンゴルの風俗習慣

おわりに

はじめに

中国内蒙古自治区西部、黄河と長城にはさまれた高原を、オルドス（鄂爾多斯）とよぶ。西、北、東三面を黄河にかこまれていることから、漢語文献には古くから河套と表現されてきた。有史以来、河套はずっと北方遊牧民と漢族との争奪地のひとつであった。この地の遊牧民は、北アジア、モンゴル高原の盟主が交替するたびに匈奴、突厥、モンゴルと称してきた。とくにモンゴルと漢族の抗争は歴史が長く、モンゴル側からの攻略と漢族の守備というイメージがきわめて強い。明代の漢族文人たちは華夷秩序の理念にもとづいて、河套にす

むオルドス・モンゴルを「套寇」、「套虜」、「套夷」と表現してきた。

明がほろんで清朝が成立すると、漢族の文人たちは大きな意識革命をせまられた。かれらが夷狄としてしかえがいてこなかった人びとのなかから、新しい支配者として満洲人があらわれたのである。気をきかせた文人たちは、新しい主人に配慮してさまざまな工夫をこころみた。たとえば明代の北方要塞のひとつに殺胡口がある。漢族の役人や文人たちは胡と同音の虎を使用して殺虎口にあらためた例がある (Serruys 1982 : 271 - 283)。このような政治的な工夫は、従来から脈々とつづいた華夷秩序のながれのなかでみれば、注目すべき変化だといえよう。そのような変化は清朝政府中央の資料のみならず、『靖辺県志稿』のような地方史からもうかがえる。

清代地方史における北方民族に関する記録については、じゅうぶん検討をかさね、資料価値の高いものは研究に活用すべきであろう。その際、漢文資料のみならず、モンゴルなど対象者側の資料、場合によってはフィールド・ワークで入手可能な現在からの回顧的口承資料もあわせて、総合的に判断し、運用することが求められている。本研究はこのような視点にたって、清代末期の地方史『靖辺県志稿』をとりあげる。靖辺県での実地調査といままでオルドス・モンゴルを対象としてきた研究が、『靖辺県志稿』のえがくモンゴル像を読解する参考になる。

『靖辺県志稿』は清末における長城沿線に位置する一地方での出来事を中心にしている。当時カトリック教勢力はすでにこの地に進出しており (Van Hecken 1949)、時代的には清朝の根幹をゆるがした西北回民反乱のあとであった。複雑な国際情勢と多民族多宗教がうみだす事件がおりこまれている。

一 表現上の意識変化—套虜から蒙古へ

『靖辺県志稿』には明代の長城防衛と清代の駅制度に関する記述がある。ここでは、モンゴル側の資料とあわせて検討してみよう。

1. 1 『靖辺県志稿』の概要

清代靖辺県は陝西省北部長城以南に位置する。長城の北側はオルドス右翼前旗 (ウーシン旗) とオルドス右翼中旗 (オトク旗) であった。現在の中国において、陝西省は清末の行政組織をほぼ全面的に踏襲している。

『靖辺県志稿』は、陝西省北部榆林府所轄の各県の史誌のなかでも、質が高いほうにはいるといえよう。『靖辺県志稿』は、当県の知事丁錫奎によって編纂

されたものである。『靖辺県志稿』「職官志」ではかれを「字黼臣甘肅秦安県進士光緒二十二年任」としている（1970：211）。丁錫奎自身による「靖辺県志稿自序」で、丙申年すなわち1896（光緒二十二年）年に着任してきたとき、地元の父老に靖辺県には以前から志書がないことを嘆かれて、地方史編纂を決意したと記している（1970：21-22）。丁錫奎は延安、榆林をふくむ各地にすむ読書人の親友に文献収集を依頼し、地元の貢生たちをあつめて『靖辺県志稿』を書きあげた。以下はその構成である（1970：37-40）。

| | |
|-----|-----|
| 第一卷 | 輿地志 |
| | 建置志 |
| | 戸口志 |
| | 田賦志 |
| | 風俗志 |
| 第二卷 | 学校志 |
| | 輿礼志 |
| | 兵防志 |
| | 職官志 |
| 第三卷 | 人物志 |
| 第四卷 | 雜志 |
| | 芸文志 |

以上のような構成は、いわば中国史書における地方史の一般的なスタイルである。隣接のオルドス・モンゴルに関する記述は、第四卷「雜志」のなかに多い。

1. 2 沿革認識—北方遊牧民と対峙の歴史

『靖辺県志稿』は「建置志・沿革」項で、北方遊牧民と対峙してきた歴史を軸にその沿革をのべている。それによると、靖辺県は「秦屬上部漢屬朔方部……（中略）唐置宥州尋没入胡歷五代趙宋皆治長澤県明置靖辺衛管理本堡及鎮羅寧塞龍州諸堡……（以下略）」とある（1970：79-80）。県となったのは国朝すなわち清朝雍正九（1731）年のことで、衛を県に改められた。県治こと県政府所在地は新城堡にあったが、同治年間の回民反乱で県治が破壊されたため、鎮靖堡に移転させた（1970：80）。つまり、靖辺とはもともと北方遊牧民の南進をふせぐ軍事拠点としての衛だったが、のちに地方行政組織の県に昇格させたとい

う。その背景について、当時の陝西承宣使は「靖辺志稿序」のなかでつぎのように論じている。「靖辺近河套在前明為靖辺衛重於屯兵以禦外侮我朝蒙古内属改衛為県」とあり（1970：1）、つまり重兵を駐屯させて外侮をふせいでいた衛だったが、モンゴルの内属によって県にかえられたという。序の執筆者をはじめ、「我朝」ということばは擡頭あつかいとなっている。

このような靖辺県であったが、19世紀末には3,171戸、人口18,420人を有していたと「戸口志」にある（1970：99）。ちなみに、1990年代現在の靖辺県の人口は24万人に達する（王華飛他 1992：173）。20世紀百年間における漢族の人口増加率は、一県の事例からもうかがいしることができよう。

1.3 長城要塞の名称

陝西省北部の漢族は長城を「辺墻」（辺疆の壁）、「白墻」（白い壁）とよぶ（写真1）。版築の長城が白くみえることからの命名であろうが、現地では辺と白は同じ発音である。

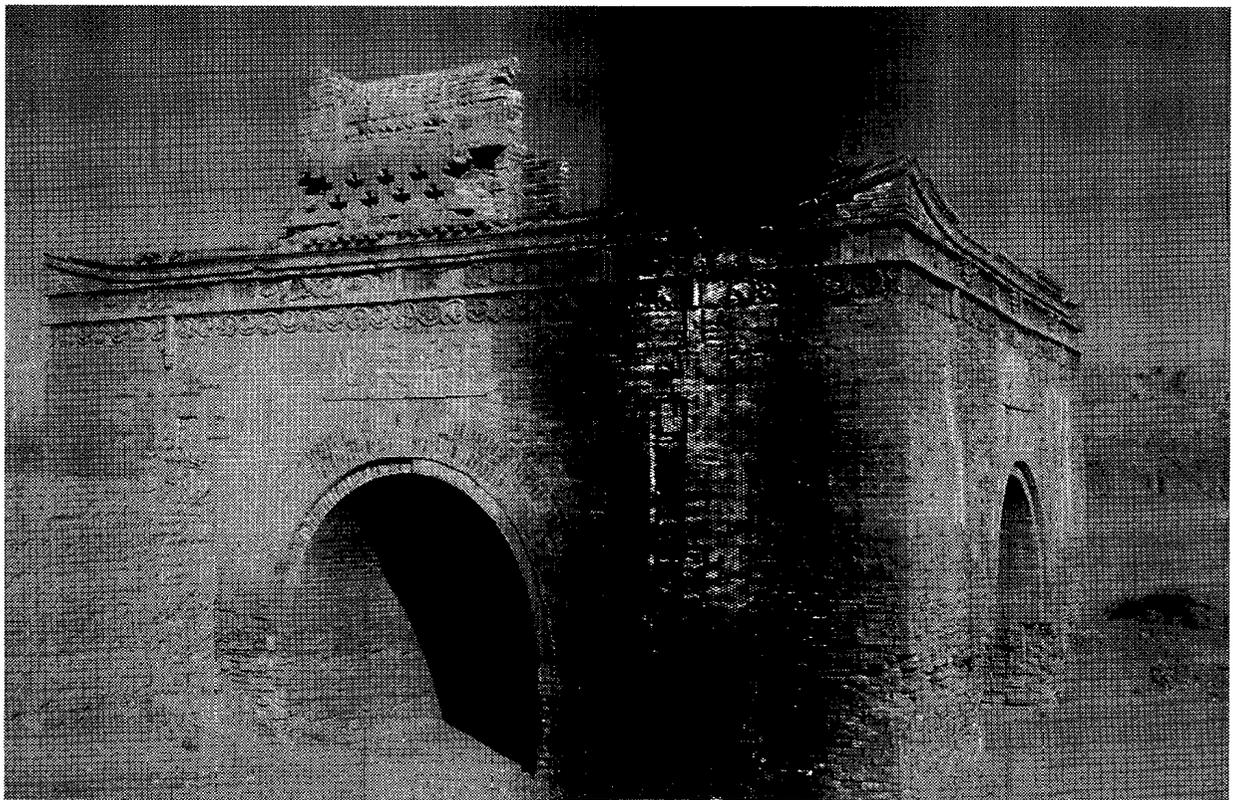


写真1 陝西省北部の長城の要塞

『靖辺県志稿』「兵防志」では、「邑為延綏門戸歴代華夷所必要之路」と位置づけ、華と夷が争奪戦をくりひろげてきたことを強調している（1970：183）。「兵防志」はとくに宋代の韓琦、范仲淹らがかつて当地で活躍し、胡騎を撃退した

歴史に記述の重心をおいている。また、明代の套虜すなわちオルドス・モンゴルによる患害をくりかえし強調している(1970:183-184)。明代のオルドス・モンゴルを套虜(河套之虜)としているのに対し、我朝(清朝)では蒙古と書いている(1970:184)。地方史の編纂者たちは意識的に「明代モンゴル」と「清代モンゴル」を区別しているようである。

つづいて『靖辺県志稿』「雑志・災劫」項では套寇の侵入を具体的にあげている(1970:303)。

嘉靖二十四(1545)年七月：套寇数万人が寧塞堡、保安を犯す。

嘉靖四十(1561)年四月：套寇靖辺堡を犯し、二千人余りを殺掠す。

嘉靖四十三(1564)年八月：套寇水害に乗じて鎮靖堡を陥す。

たびかさなる套虜の攻略をふせぐため、辺牆がきずかれた。「雑志・辺牆」項では、長城建設は周代末期からはじまるとし、現在の長城は明の成化年間(1465-1487)に延綏巡撫余子俊によってたてられたと記している(1970:287-288)。長城のみでは役にたたないため、要所にはさらに複数の城池衛堡が建築された。城池の多くは古城の跡を再利用している(1970:80-84)。

長城沿線の城池に漢族は象徴的な意味をもつ名称をつけてきた。一方、モンゴルはそのような対立をイメージさせる表現をもちいることなく、中性的な名前でよんできた。以下はその具体例である。

鎮羅堡：すなわち鎮魯堡(1970:82)。清代は羅や魯をつかっているが、おそらく本来は虜を使用していたであろう。少なくとも清代の陝西省北部の漢人は清への配慮から、虜はもっぱら套虜として、限定的にもちいていたようである。鎮羅堡のモンゴル名は、チャイ・ホト(Čayija Qota)で(Mostaert 1956:104)、「お茶の城」という意味である。往時の茶馬貿易に由来するかもしれない。

寧塞堡：古代の栲栳城(1970:83)。モンゴル名はハラ・ホト(Qar-a Qota)で(Mostaert 1956:105)、「黒い城」との意味である。

龍州堡：漢の龍州、宋の范仲淹哨馬營もこの地にあり、明成化五(1469)年に築城される(1970:84)。モンゴル名はウラーン・ホト(Ulayan Qota)

で (Mostaert 1956 : 104) で、「赤い城」との意味である。

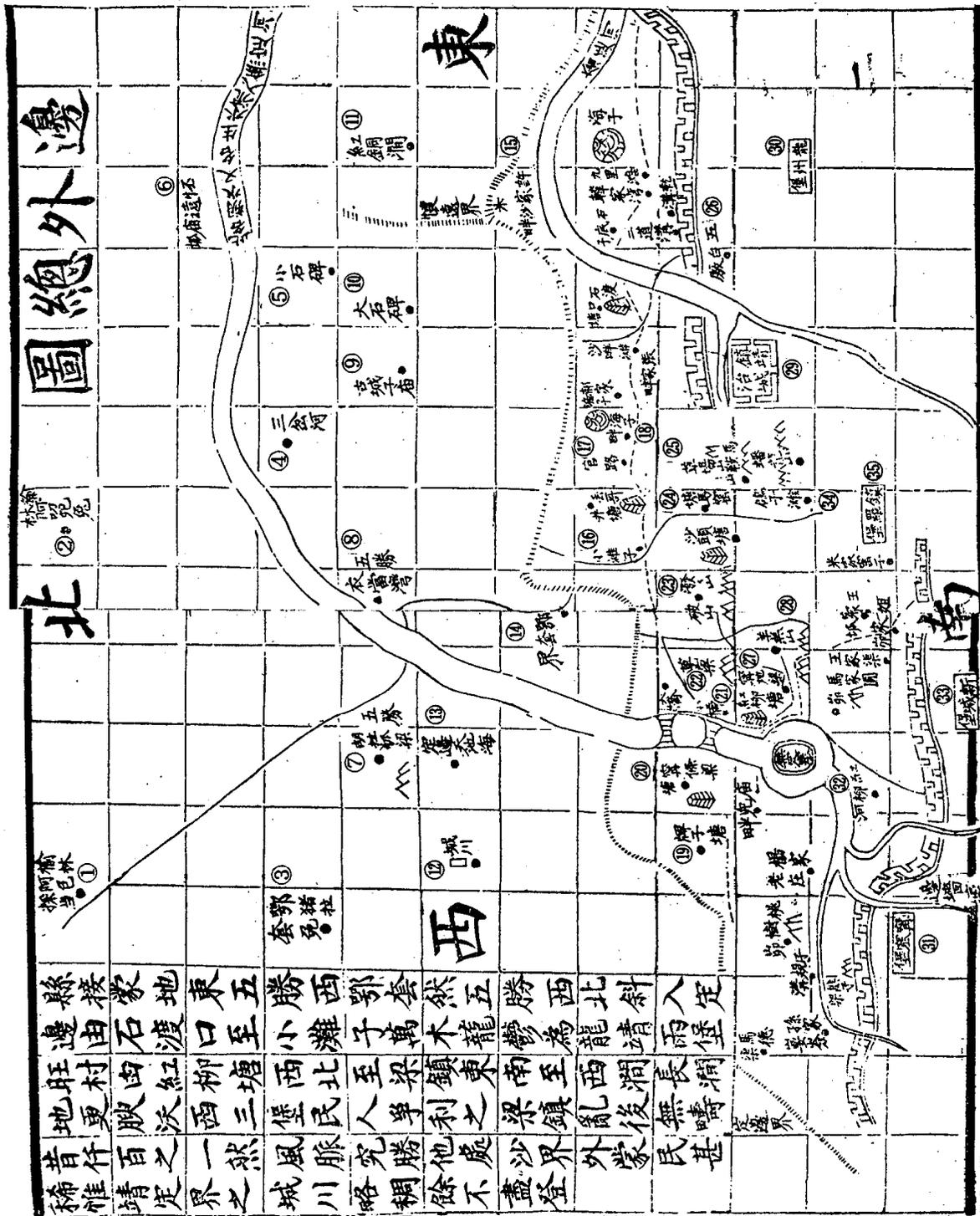
靖辺營：古夏州兀喇城に由来し、明景泰四 (1453) 年に新しい城をきずいたことから、俗に新城堡とよばれるようになる (1970 : 81)。兀喇城の「兀喇」も漢語ではなかろう。モンゴル名はボロ・ホト (Boru Qota) で (Mostaert 1956 : 104) で、「灰色の城」との意味である。

鎮靖堡：明代成化年間にきずかれた (1970 : 80 - 81)。モンゴル名はタール・ホト (Tar Qota) で、おそらくこの城の漢語別名「灘児」に由来するのであろう (Mostaert 1956 : 104)。

以上五つの城堡以外に、寧塞堡の近くには以前に把都河堡があり、万曆六 (1578) 年に寧塞堡に吸収されている (1970 : 69)。把都河堡をモンゴル人はバドグ・ホト (Baduyu - yin Qota) とよぶ (Mostaert : 1956 : 105)。把都河堡は紅柳河の一支流で (1970 : 69)、モンゴル語地名をそのまま漢族が利用したことになる。現在でもモンゴル人は紅柳河東岸の草山梁 (Ebesütü - yin Sili) の山頂にある聖地を、バドグ・イン・オボーとよぶ。上記した城池要塞のモンゴル名は現在でも使用されている。

1. 4 駅制度

『靖辺県志稿』「兵防志・郵駅」では、靖辺県内の駅について述べている。興味深いことに、これらの駅はすべて長城の北側に位置し、同書の「辺外総図」では塔のかたちでえがき (地図 1)、塘とよんでいる (1970 : 58 - 59)。駅は、それぞれ県内の明代にきずかれた五つの堡に属するという。駅の管理運営を明代の軍事城堡とむすびつけている制度からみれば、清朝は長城沿線の軍事的価値をじゅうぶんに認識していたと推察できよう。各城堡が設けた駅には以下のように駅馬が常備されていた (1970 : 195 - 199)。



地圖1 『靖邊縣志稿』所載の「邊外總圖」(部分, 番号は楊による)

龍州堡設塘石渡口駅：馬 20 頭。

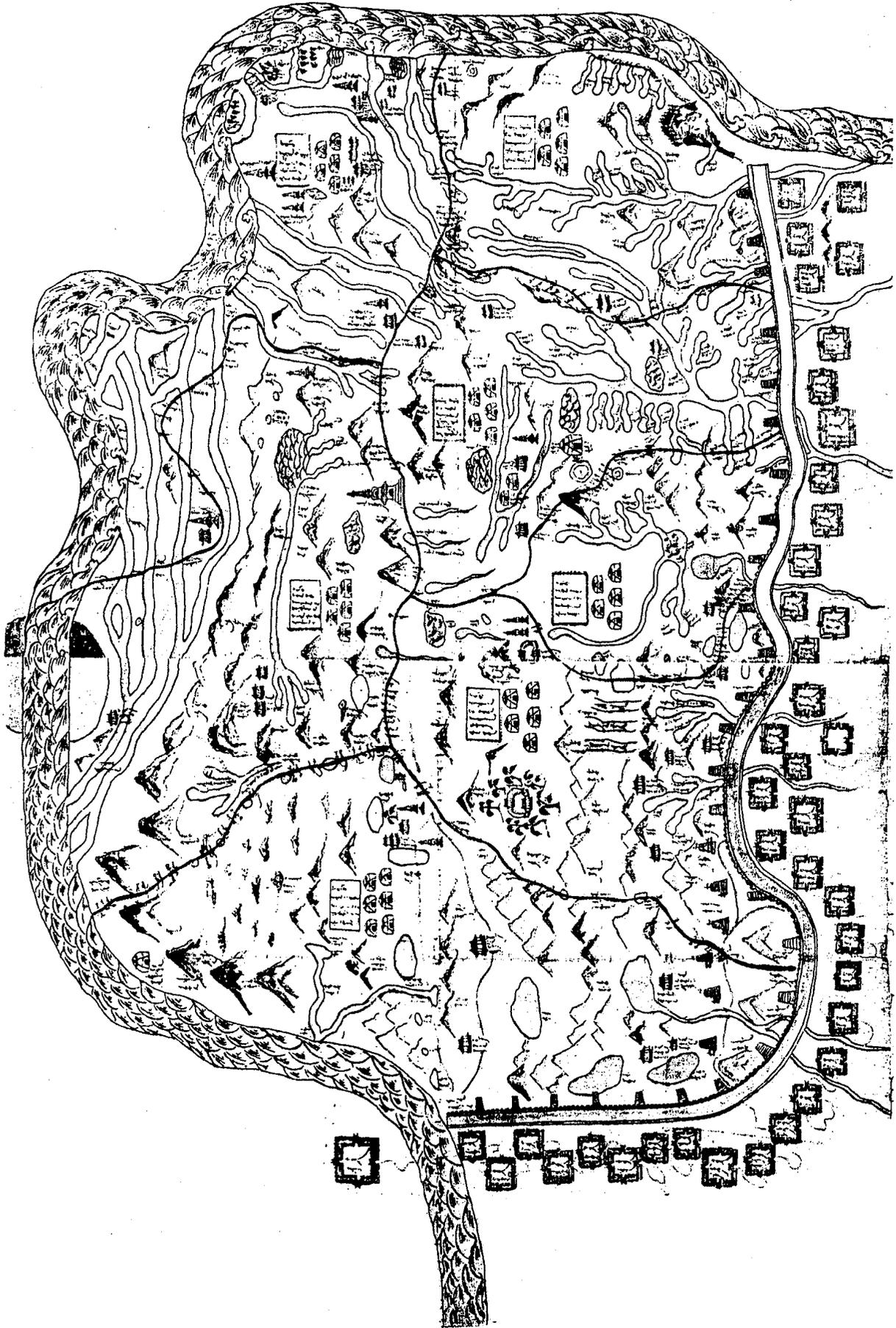
鎮靖堡設塘丟哥井駅：馬 15 頭。

鎮羅堡設塘沙頭駅：馬 20 頭。

靖辺堡設塘紅柳駅：馬 6 頭。

寧塞堡設塘寧條梁駅：馬 17 頭。

モンゴル人は駅道の道をウルテーン・ジャム (Örtege-yin Jam) とよぶ。清代オルドスにおける駅道の道を記録した資料として、1740 年代に描かれ、20 世紀初頭までにオルドスのオトク旗衙門に保存されていた地図 (Mostaert 1956 : 81 - 124) が参考になる (地図 2)。



地図2 1740年代に書かれた鄂爾多斯七旗圖。Mostaert1956より。

1740年代の地図には二本の駅の道が描かれている。そのうちの主要な一本、「駅大道」はオルドス六旗を東西に貫通し、西はイルデルキ・ホト (Ilderki Qota) すなわち横城堡をとおって銀川にいたる (Mostaert 1956:110)。もうひとつは、南のゲーティ・ホト (Geitei Qota) すなわち懐遠城とその西のバガ・マーシン (Bay-a Mašing) こと安辺のあいだに描かれている (Mostaert 1956:109)。ただし、この南の駅の道の東端は二つあり、ひとつはゲーティ・ホトで、もうひとつはウラーン・ホト (龍州堡) とつながっている。「辺外総図」でも石渡口塘は、龍州堡と懐遠界の2箇所とつながっている (1970:58)。

上記官営の駅の道以外にも、民間の道はほかにもあった。たとえば、長城のテメート・ホト (Temegetü Qota 榆林城) から北へウーシン旗にはいり、シニ・スウメ寺をとおって銀川につく道も機能していた。近世になると、モンゴル人は漢族にならって、もっとも南の懐遠・安辺間の道を「一馬路」、榆林・銀川間の通商路を「二馬路」、古くからの「駅大道」を「三馬路」とよぶようになった。

靖辺県内五つの駅のうちのひとつ、もっとも西に位置する寧條梁塘は、のちに大きな町に発展した。寧條梁のモンゴル名はソハイン・バイシン (Suqai-yin Bayising) で、「紅柳のある固定家屋群」との意味である。寧條梁の東を流れる河の名も紅柳河とあるくらい、紅柳は湿地帯や河川沿いに広く分布する灌木である。バイシンとは天幕ゲルと異なる固定建築の家屋をさす。この地名は、寧條梁が漢人によって形成された集落であることをあらわしている。漢族は寧條梁鎮を梁鎮と略してよぶ。

『靖辺県志稿』『田賦志』では、「梁鎮本係蒙地…… (中略) 旧有塩局分卡歸甘肅委弁…… (中略) 按花定塩局在定辺県光緒初年經前閣督左宗棠奏准由甘肅委員督弁東西路各有分卡…… (以下略) とある (1970:112)。つまり、寧條梁は本来モンゴルの土地であるが、左宗棠が西北経営の一環として、定辺県に設置した「花定 (花馬池・定辺の略) 塩局」の分卡 (分局) をこの地に設けたということである。オルドス西部オトク旗の塩湖開発は清末から民国期まで甘肅塩局と密接なつながりをもっていた (Serruys 1977:338-353)。ソハイン・バイシンは、塩売買の中継地としてさかえたのであろう。「戸口志」によると、清末には靖辺県の一鎮になり、その人口は618戸、3,226人に達していた (1970:98)。

二 境界認識と漢族の入植

漢族とのあいだに引かれた政治的、物理的な境界線は長城である、とモンゴル族は認識している。これに対し『靖辺県志稿』では、オルドス・モンゴルに属し、康熙年間から季節的に開放し、漢族に開墾させていた黒界地(Qar-a Qoriyul-un Γajar)を靖辺県の境界として理解している。つまり、漢族が長城を越えて新たに占領した土地はモンゴルに属さないとの態度である。

2. 1 境界認識

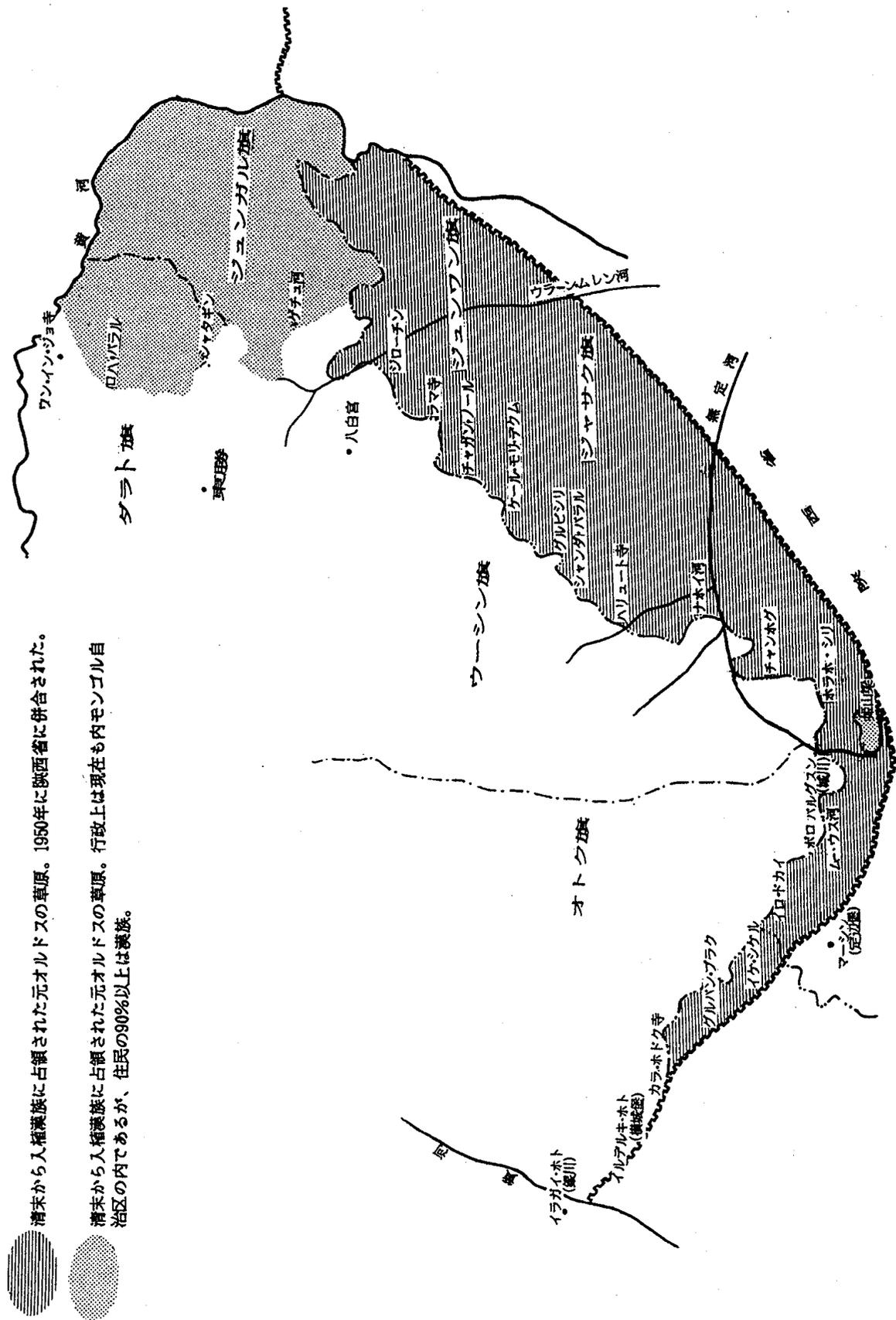
靖辺県の法定領土はすべて長城以南にある。長城以南の境界は別として、「輿地志・疆界」項では、長城以北の境界についてもものべている。「新治鎮靖堡為県城……（中略）北門外即辺牆出口至四科樹六十里与懷遠県之本塔児梁接界……（中略）東北至毛五素六十里与懷遠県之徐家沙畔接界……（以下略）」とある（1970：60）。つまり、県治鎮靖堡の北にある長城の城門を出て、四科樹まで六十里で、ここで懷遠県（現横山県）の本塔児梁に接し、東北へ行くと、六十里で毛五素につくとのことである。本塔児梁とはモンゴル語でいうベン・トゥルン・シリ(Bengtür-ün Sili)という山のことで、毛五素（現毛烏素）とは、ムーウス(Mayu Usu、「悪い水」との意味)の漢字表現である。ベン・トゥルン・シリはウーシン旗のケレイト部、ガルハタン部の放牧地であり、その山頂にはガルハタン部の聖地オボーがある。1828年に漢族の入植に武力で反対する集会もここでひらかれた(Γarudinorbu & Jangyabayatur 1997：77-78)。ベン・トゥルン・シリとムーウスは現在も靖辺県が実効管理しているが、一旦中断していた聖地オボーの祭祀を復活させたり、墓まいりに行ったりして、モンゴル側の一部で失地回復運動が1980年代からみられるようになった。

「輿地志・諸山」項では、「今治鎮靖城……（中略）又五里為草場山山巔有狼烟燉俗名煙燉梁……（中略）又折西為澆々山又西三十里為破山又三十五里為姫山梁又西十里為草山梁又十五里為寧條梁鎮」とある（1970：62）。ここでいう草場山（烟燉山）はすなわちベン山(Bayin Ayula)で、姫山梁はバドグ・オボーである。漢族が姫山梁とよぶ山は1900年にオルドス・モンゴルから小橋畔を拠点とするカトリック教会に割譲された土地内にある(Van Hecken 1960：288 & Erdenibayar 1984：27-28)。1950年代にカトリック教が撤退したあと、オルドス・モンゴルは当該地域での権利を執行しようとしたが、入植者が絶対多数をしめていたため、靖辺県が実効管理することになる。姫山梁は現在オルドス・

モンゴルの飛び地となっており、姫山梁周辺の内蒙古自治区と陝西省との境界も未画定である。

漢族は、長城以北の黒界地の開墾を「中外和耕」と表現している。中は漢族農民で、外はモンゴルをさす。すでにふれたように、「靖辺志稿序」では「我朝蒙古内属」と書きながらも、モンゴルは「中国の外」である、という認識が清末の漢族知識人に依然としてのこっていたことが露呈している。また、モンゴルの草原を漢族が「和耕」したと表現し、草原開墾に対するモンゴル側の武装抵抗などについてはまったく無視する態度をとっている。

「雑誌・中外和耕」はつぎのように書いている。「康熙三十六（1697）年に貝勒ソンラブ王が（黒界地の）共同開墾を上奏した。五十八（1719）年にはまた遊牧地の狭小を上奏し、長城外二、三十里のところに交界を設けることが許可された」という（1970：291）。ここでいうソンラブとはオトク旗の王で、1682年に貝勒になり、1709年まで在位し、1740年に書かれた「オルドス七旗」にも「王ソンラブの殿」(Vang Sungrab-un Diyan)とあり、その名が確認できる (Mostaert 1956：107)。当初、漢族農民は旗に一定の租税をはらっていたが、雍正八（1730）年に尚書特古忒の介入により、「五十里（黒界地）も中国の禁地」であるとの理由で、モンゴルへの納税が中止となる（1970：291）。その後早ばつもかさなり、ふたたび納税するようになるが、乾隆年間になると入植者は倍増する。乾隆七（1742）年にジュンワン旗の王ジャムヤンが再度入植漢族の駆逐を要請する。そこで川陝総督馬爾秦、尚書班第らの仲介で、盟長ジャムヤンらと協議の結果、現耕の地に土堆をたてて疆界とし、漢族入植者を登録し、定辺同知がモンゴル事務を管理することになる（1970：291-292）。このような紆余曲折をへて、ついに「和耕」が既成事実になる。陝西省の漢族入植者がオルドスで占領した土地を示したのが地図3である。そのうち、靖辺県からウーシン旗領内に侵入してきた漢族の人口と開墾した土地は表1のとおりである。



清末から入植漢族に占領された元オルドスの草原。1950年に陝西省に併合された。

清末から入植漢族に占領された元オルドスの草原。行政上は現在も内モンゴル自治区の内であるが、住民の90%以上は漢族。

地図3 陝西省からの入植漢族が占領したオルドスの草原。楊 1994 より。

表1 靖辺県からウーシン旗領内に入植してきた漢族の人口とその開墾面積

| 地名 | 入植戸数 | 人口 | 開墾面積 |
|---------------|-------|-------|--------|
| 龍州堡 (ウラーン・ホト) | 95 | 539 | 3,121 |
| 靖鎮堡 (タール・ホト) | 527 | 3,321 | 15,810 |
| 鎮羅堡 (チェイ・ホト) | 131 | 786 | 9,240 |
| 新城堡 (ボロ・ホト) | 288 | 1,707 | 8,220 |
| 寧塞堡 (カラ・ホト) | 185 | 1,075 | 10,632 |
| 寧條梁鎮 (バイシン) | 133 | 944 | 9,468 |
| 合計 | 1,359 | 8,372 | 56,491 |

注：() 内はモンゴル名。面積単位は「シャン」で、一人の人間がウーシン頭と犁具一セットを使用、一日中に開墾できる面積。「垧」と表記し、だいたい15畝に相当。

資料出典：『靖辺県志稿』1970年 p.294 - 296

2.2 中外和耕という入植

『靖辺県志稿』は「雑志」のなかでウーシン旗とオトク旗内にある入植地の領域について言及しているが、不可思議な点が多い。「雑志」によると、ウーシン旗の領域は、「東南は靖辺県の五台廠からはじまり、西北は懷遠県阿包採當にいたる。東北は懷遠県廟坨からはじまり、西南は靖辺県の塘馬窟にいたる。東は懷遠県許家沙畔からはじまり、西は靖辺県天池海子にいたる。北は榆林県阿叨兕図からはじまり、南は靖辺県の鴿子灘にいたる」という(1970:292-293)。以上の地名のなかで、唯一五台廠が長城以南にある。もっとも不可解なのは、長城以北の黒界地内の塘馬窟と鴿子灘、黒界地からはるか北にある天池海子を靖辺県の領有とし、阿包採當と廟坨、許家沙畔を懷遠県所有、阿叨兕図を榆林県所属、としている点である。別の資料をみてみよう。たとえば『清史稿』(卷七十七・志五十二・地理二十四)では「鄂爾多斯右翼前旗、套内西南。……(中略)牧地当陝西懷遠西北大鹽灤。東界左翼中旗、南界懷遠、西南右翼中旗、北界右翼後旗」とある(趙爾巽 1976:2419)とあり、オルドス・モンゴル側の領土が長城の懷遠県までだったことが記されている。長城に近い黒界地も含め、長城以北にあるモンゴル固有の領土の一部に対して、靖辺県がこのように

所属権を主張するようになったことが明らかである。

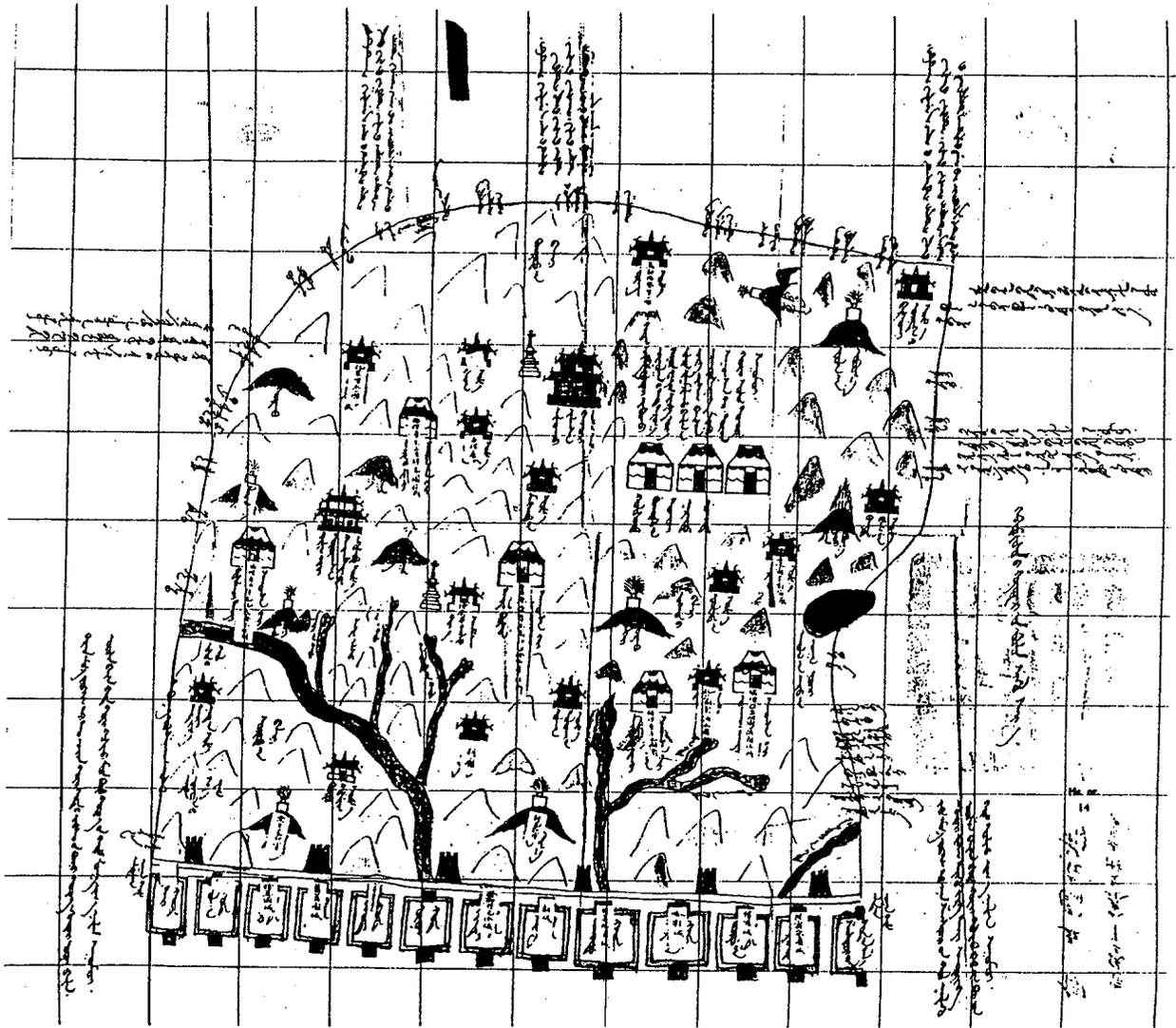
オトク旗の領域に関する記述をみてみよう。「東南は靖辺県の姫家峠からはじまり、西北は靖辺県所属の猪拉兔にいたる。東北はウーシン旗の衣當湾からはじまり、西南は靖辺県の熊子梁にいたる。東はウーシン旗の塘馬窟からはじまり、西は靖辺県の牌子灘（塘）にいたる。北はウーシン旗の胡拉狐梁からはじまり、南は靖辺県所属の長城にいたる」という（1970：293-294）。ここでも、姫家峠と猪拉兔、熊子梁、牌子灘（塘）など長城以北の土地を靖辺県所属と主張している。

靖辺県側のこのような主張は「辺外総図」（地図1）にもあらわれている。以下は「辺外総図」にある重要な地名とそのモンゴル名である。

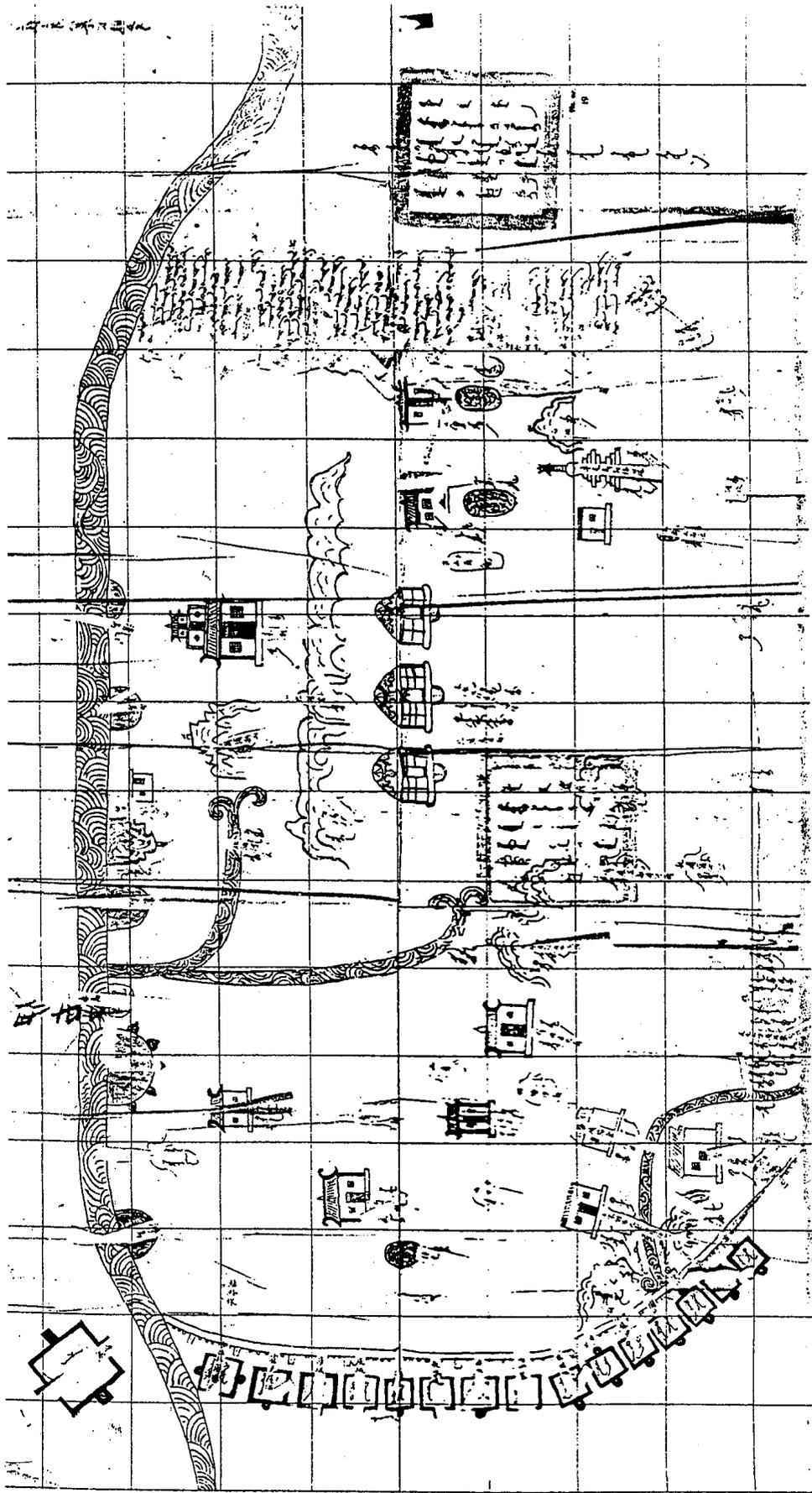
| 漢語名 | モンゴル名 |
|-----------|----------------------------|
| 1：榆林阿包採當 | Oboγ-a-yin Čayidam |
| 2：榆林阿叨兒兔 | Adaγutu |
| 3：鄂套猪拉兔 | Otoγ-un Ĵulatu |
| 4：三岔河 | Γurban Salay-a |
| 5：小石碑 | Bay-a Siber |
| 6：懷遠廟圪 | Geütei-yin Süm-e (?) |
| 7：五勝胡拉狐梁 | Quraqu-yin Sili |
| 8：五勝衣當湾 | Idam-un Toqai |
| 9：古城子廟 | Yeke Siber, Siber-ün Süm-e |
| 10：大石碑 | Yeke Siber |
| 11：紅銅澗 | Qungtur-un Qoyulai |
| 12：城川 | Boru Balyasun |
| 13：定辺天池海子 | Suqai-yin Tangyalay |
| 14：鄂套界 | Otoγ Üüsin-u Ĵaq-a |
| 15：許家沙畔 | Bongtur-un Sili (?) |
| 16：小灘子 | Bay-a Čayidam |
| 17：官路 | Örtege-yin Ĵam |
| 18：海子畔 | Mangruγ-un Bulay |
| 19：牌子塘 | Payisan Bulay |
| 20：寧條梁塘 | Suqai-yin Bayising |

| | |
|--------|---------------------------------------|
| 21：小橋 | Kögürge |
| 22：草山梁 | Baduγu-yin Oboγ-a (Eebesütü-yin Sili) |
| 23：澆々山 | Qarγatu-yin Aγula |
| 24：塘馬窟 | ? |
| 25：草場山 | Bayin Aγula |
| 26：五台厰 | ? |
| 27：寧地梁 | Tügükei Toyurim |
| 28：羊羔山 | Oγonotu-yin Aγula |
| 29：鎮靖堡 | Tar Qota |
| 30：龍州堡 | Ulayan Qota |
| 31：寧塞堡 | Qar-a Qota |
| 32：紅柳河 | Suqai-yin Γool (Sir-a Usun Γool) |
| 33：新城堡 | Boru Qota |
| 34：鴿子灘 | Am-a Sar-un Sübe (?) |
| 35：鎮羅堡 | Čayija Qota |

このように、上記「辺外総図」の新しい漢語地名にはモンゴル名があり、なかにはモンゴル語の地名を漢語に意識、音写したものもある。さらに、1910年12月に描かれたウーシン旗とオトク旗の地図 (Heissig 1978 : 130-131) には、両旗はその領土の南端をすべて長城以北からはじまるとしており、あくまでも長城を漢族との境界として認識していることが明らかである (地図4, 5)。清末になると、入植地を獲得して百年以上がたち、新しい土地を靖辺県の所属であると漢族側が主張するにいたったことがよみとれる。



地図4 宣統2年に書かれた鄂爾多斯右翼前旗（ウーシン旗）の地図。
Heissig1978より。



地図5 宣統2年に書かれた鄂爾多斯右翼中旗(オトク旗)の地図。Heissig1978より。

三 入植地の「物産」とモンゴルの風俗習慣

以上、清末期に靖辺県の漢族農民がオルドスにおいて入植地を開拓し、占領した草原を自らの所有とする主張が一方的に発生していたことについてのべた。このような政治的な衝突と並行して、経済交易もさかんにおこなわれていた。人的交流にともなう、相互の風俗習慣も当然観察の対象となる。ここでは、靖辺県の漢族とモンゴル族との交易、漢族の目から見た19世紀のオルドス・モンゴルの風俗習慣をとりあげる。

3. 1 モンゴル物産への依拠

「雑誌」で「蒙番狎処漸通語言中外一家……牛馬寄牧茶塩乳酥互市」とある(1970: 287)。『靖辺県志稿』「田賦志・物産」項では、靖辺県の正北に遊牧するウーシン旗とオトク旗のモンゴル族との交易について、つぎのような記述がある(1970: 113)。

靖辺県人は農業をいとなむ者が多い。(中略) 長城にそってモンゴルに近い地域は牧畜に適しているが、ウマの生産は懷遠と榆林の北にいる蕃におよばない。牛乳で作った餅餌チーズに漢人はなじめない。またヒツジも定辺以西の(オトク旗の)ヒツジにおよばない。仔ヒツジを屠殺せず、そのため羊皮の毛なみも均等である。(羊毛は)まったく加工されず、いつでも収集できる。毛氈フェルトと絨毯はあるが、毛線と毛布はない。氈服もない。県の土人(漢人)はよくモンゴル人をだまして羊皮を入手する。近年、羊皮と羊毛は海外へ販出しているため、その価格は急激にあがっている。かつては錢数十枚から百枚の値だったが、いまや千百枚になっている(以下略)。

ここで若干の説明が必要であろう。靖辺県の正北で遊牧していたのは、ウーシン旗のケレイト部、ガタギン部などである。懷遠と榆林の北にはウーシン旗のウイグルチン部、ガルハタン部とジャサク旗のモンゴルが生活していた。また、定辺以西ではオトク旗のタングート部などが居住していた。なかでもとくにケレイト部とガタギン部の放牧地はもっとも早く靖辺県五つの堡の入植地にされたため、草原をうしなしたモンゴル人が北へと撤退していった。さらに、同治年間の回民反乱のときも靖辺県に隣接するウーシン旗がもっとも大きな被害をうけたため、ウマやヒツジなどの質に影響がでたと推測される。そのため、

漢族はウーシン旗よりもオトク旗などの畜群の質を評価しているようだ。

漢人商人はとくに羊毛と羊皮に関心が高かった。なかでも仔ヒツジの皮がうすく、歓迎されたという。「物産」項ではさらに甘草 (sikir ebesü)、沙蒿 (sir-a šabay-un idege)、沙米 (čülik^{キツネ}er)、沙木耳 (šabay-un čečeg)、蘑菇 (üliy-e)、苦参 (buray-a) などの植物や、狐狸、鹿、狼など野生動物をもとりあげている (1970 : 113 - 115)。

上記の「物産」はいずれも長城以北のオルドス草原に生長し、生息する。長城以南の黄土高原にはきわめて少ない。このように、漢族は入植によって獲得した土地から産出する植物やそこにすむ動物に対しても、みずからの「物産」として認識していたことが明白である。

3. 2 漢族がみたモンゴルの風俗習慣

『靖辺県志稿』はその「廟壇」のなかで「邊人信鬼神謬悠幻怪往々無名野祠動稱某大王某娘娘某郎某將軍之類」とあり (1970 : 89)、土着の信仰の多様性を示している (写真2)。また「風俗志」のなかで、漢族自身の習慣についてのべたところで、「惟蒙番雜処戸少詩札」とし、また洋学をひろげようという県知事



写真2 陝西省北部の漢族占い師 (算命人)。神話や歴史上の某將軍あるいは某娘娘の代わりに託宣するパターンが多い。

の報告にも「蒙漢雜処地不發科人不讀書」と表現している（1970：119；346）。地元の漢族が詩や礼といった儒教文化を軽視し、読書をせず、科擧に合格しないのは、すべて「蒙番雜処」が原因だとしている。進士出身の知事と地元の貢生たちの見方である。

漢族は歴史的に長く套寇すなわちオルドス・モンゴルに攻略され、武力の面で積極的に出撃しなかったことから、農民社会には一種のコンプレックスもあったのではなかろうか。コンプレックスがたちこもる社会では、ときとして英雄の誕生に期待をよせる。『靖辺県志稿』「人物志・俠客」項では、王俠客の伝説を記録している。幼いときにオルドスに入ってたきぎをひろおうとしたところ、モンゴルに侮辱されたため、大きくなってからモンゴルのウマをぬすんでつれかえることができたことから、名声がひろまったという（1970：264-265）。このような武勇譚はたったの一例しかない。現在でも靖辺県の漢族のあいだでは、「生蒙人」は怖いという認識がある。「生蒙人」とは現代語で、「靖辺県志稿」では「生番」としている（1970：296）。ここで「靖辺県志稿」がえがく「生番」の風俗習慣（1970：296-302）をみてみよう。以下、漢文の和訳は基本的に意訳とするが、段落は訳者による。

蒙古はまた韃靼^{タタル}と号し、（その分布範囲は）遠く山西省と甘肅省にまでひろがり、河套の奥地までつづく。漢族はその居住地を後草原、かれらを生番とよぶ。靖辺県に近隣する張家畔（Janba-yin Tal-a）の西北にある大石礪（Yeke Siber）、小石礪（Bay-a Siber）、生地畔（Tügükei Toyurim）、黄蘗灘（Qar-a Tal-a）などはすべて蒙巢であり、これらの地にすむのは熟番である。熟番は漢民に通じ、貿易の往来があり、漢語もわかり、辮髪と冠服もやや漢族に近い。酒をすこぶる好む。また漢族のものを好み、なかでもとくに茶を命のごとく愛飲し、そのため明のときに茶馬互市があったぐらいだ。散懶^{なまけもの}で、顔はみにくく、心は巧みである。官吏にあうときと仏に参拝するとき以外は髪に櫛を入れず、顔も洗わない、あるいは終生沐浴をしない。

男は耕作をあまり知らず、（たまにあっても）播種は早い。穀物として糜があり、一部では莠麦、燕麦もあるが、味は内地のものにおよばない。野菜として圓羹、漢蔓菁を栽培する。季節は白露になると、霜と雪がふり、毎年欠作になる。かれらはもっぱら畜牧にたより、ヒツジが少なく、ウマとウシがもっとも多い。漢人がかれらに放牧を委託する場合、報酬は少な

く、メスの家畜が仔を生んだとき、青蚨千文以上を支払う。ただし委託した漢人がときどきみにいかないと、仔を隠匿して教えなかったり、別の劣った仔と交換したりする。

蒙地では塩が産出され、モンゴル人もまた塩の販売にたずさわる。二、三人でウシ数十頭のキャラバンを組み、蒙塩をのせて、布帳や鍋碗をたずさえて延安、綏徳各路を往来する。昼間は何も食べない。夜になると、道ばたの水草のあるところに鞍をおろし、テントをはり、五徳をたて、野のたきぎで火をおこして自炊する。夜にはウシを野に放し、人は裘をはおって交代で寝るが、犬をもって（一同を）まもらせる。このように一銭もかからずに塩を売り、税金も課されることがない。塩を売った帰りには、粟や米、木材、茶などの貨物を購入する。苦難をなめる旅であるが、利益もまた大きい。漢族のなかにも最近かれらにならって（塩販売をする）者もあらわれた。

モンゴル人の女性は纏足をしない。服は男と同じで、髪を二つの辮髪に均等に分け、肩にそって垂らしている。辮髪を皂色の油布でまき、練垂とよぶ。また珊瑚、瑪瑙、松石、蜜蠟などを辮髪につける。頭髪の前後にも宝珠をつけ、これらの宝飾は非常に高価である。まだ結婚していない女性はこのような飾りをつけることはない。頭に豪華な飾りをつけるのに対し、足は革靴をはく。かれらの着る長衣の袖は細く、裾は長い。夏は布製、冬は皮製で、良悪の均等が悪く、すべて頭飾りとのつりあいととれていない。

革と毛氈で家屋をつくり、その形は圓く、（漢族の）蒸飾のようにみえる。畜舎もそのそばにあって、腥気が家中に充ちる。熟番は中華風にならい、木を伐採して家屋をたてるが、レンガも瓦も使わない。ただ葦などを編んで屋根とし、そのうえに牛糞をまぜた泥をぬる。家屋の外に墻垣がなく、なかには便所もない。野外で排泄し、男女が向かいあってすることもときどきある。客人が訪れても、その荷物を室内にもちこんではいけない。天幕内に入ってから、客は左から右へすすめば礼儀が正しいと喜ばれるが、右から左へすすめば（モンゴル人は）男女とも怒り、客が主人を侮辱したとみる。天幕内の南東部に桶があり、木製の攪拌道具がそなえてある。客人は自らその攪拌器を使って桶内の乳を攪拌してのむことも喜ばれ、客人が主人を手伝っているとみられる。

道中どこかで知らぬモンゴル人にであっても、話かけると喜ばれる。牛糞を燃料として使う。お茶をわかし、糶粍チーズを入れ、さらに塩や黄色いバター

を加えて食べる。そのようなチーズ類の味はすっぱい。牛乳を加熱加工し、精鍊されたものは酥で、そのつぎは^{ウルム}奴皮で、残り渣は糶粍である。モンゴル人は食事をするとき、各自懐から木碗をとりだして使い、箸はない。食べおわると舌でなめて木碗をきれいにし、また懐に入れる。漢人でモンゴル語のできる者は、飲食の面でもモンゴルの食物を好む。

病気になると、モンゴル人は叢林におもむいて野草を採取し、たとえ薬草の本にのっていないものでも治る。あるいはラマ僧をまねいて読経をしたり、たまには漢人の巫者にたよったりもする。単皮鼓をたたき、商羊舞をし、このあいだに行来を禁じ、見知らぬ人も三日間これをまもる。

結婚にあたっては、かれらもまた媒酌人をたてる。ウマやウシ、ヒツジなどを婚資とし、ラマ僧がトいで式の吉日を決める。結婚式するときには花婿が花嫁を迎えに訪れると、老夫人によって花嫁の寝室まで案内される。宴会のときには花婿側からの一同は花婿とともに宴席に入る。牛の丸煮を最高とし、その次はオスのヒツジの丸煮である。宴会がおわると、花嫁はつきそいの^{インジ}媵女たちにかこまれて花婿とともにウマに乗って花婿家へ向かう。花婿家についてからまず義父義母に挨拶する。花婿側はまず炒ったキビやバター、ウルムの入ったお茶で花嫁側からの親戚一同をもてなす。つづいて酒杯をかわし、蛮曲をうたい、諢蕩きわまりにいたり、これをもって満足とする。黍酒と乳酒をのみ、淡と酸の味に泥酔し、日夜をかさねてはじめてさめる。

子どもが生まれたときは冷水で体を洗い、これを洗胎とよぶ。そのため、彼らは嚴冬雪天のときに外に臥しても寒さのため戦慄することはない。二、三人の子どもがいるときは必ずひとりをしてラマ僧として出家させ、終身読経して婚配はしない。

葬送に棺槨を用いず、柳を筒状に編み、そのなかに遺体を黄鼠のようにしゃがませて収める。静かなところにおいて木をあつめて火をつける。焰がおさまったところで骨を集めて二尺ほど掘った坑に埋める。ラマ僧をよんで誦経させる。死者が生前に着用していた衣服はすべて野外に捨てて燃やすが、ただその人のウマと馬具は読経したラマ僧の報酬とする。禪祥の礼はなく、四十九日間喪に服す。満一年の忌日には兄弟妻子が追悼の祭祀をおこなう。

かれらは仏教を篤く信じる。その活仏は邸廟に居住する。モンゴル人は金宝をたずさえて数千里もの遠くから野宿しながら活仏に朝見を訪れる。

これを朝山ともいう。一步一步香を焚きながら懺悔をする。廟に到着すると金宝を献上し、活仏に謁面できればはなはだ光栄とみなす。

廟内は金銀や宝珠で飾られ、これらはすべてモンゴル人が貢いだものである。廟はモンゴル語で召^{ジョ}という。土地のラマは小廟に居住し、毎年中元節には誦経をし、跳鬼^{チャム}がおこなわれる。モンゴル人十人あまりが選ばれ、牛頭や馬面をつけ、あるいは各種の神々に扮して、綵をまとい鉞をもって登場する。……（中略）。この日は官民大会で、みな妻子をつれて宴会に興じる。（廟会のとくに）モンゴル人の役人は帳幕に坐し、一般の人びとは五体投地の礼拝をし、そのかたちは蛇のようである。宴会が終わって一同は解散する。

毎年陰暦五月十三日に馬群を放牧する各家は精健のウマを選びだして古城子廟（Siber Süm-e）、黄蒿灘（Qar-a Šabay）に集まって、競馬大会がおこなわれる。役人の監督のもと、勝負を決める。勝った者には役人からヒツジの丸煮が与えられる。トップの者にはまた一串二百文の廟香銭が褒美として授けられる。後ろに落後した者は頭に冷水と酸乳がかけられる。廟香銭ももらえずはすかしめられ、励まされる。

また、モンゴル人は婚約を協議する際、男女がウマにのって馳争し、将来をとうという。もし男が勝てば婚約は成立する。女が勝てば二人は離れる。かれらはこのように尚武をし、男女とも鎗馬を習うため、家も兵^{やしな}を作ることができる。

以上「生蕃」の風俗習慣に関する記録を訳したが、その記述から以下の点に注目したい。

まず韃靼^{タタル}ということばが使用されていることである。宮脇淳子はモンゴル帝国と明との関係について述べたときにつぎのように指摘している。「中国王朝の明は、モンゴル高原で遊牧生活を送っている人びとが、元朝と深い関係にあったモンゴル帝国の後裔であることを知りながら、かれらをモンゴル（蒙古）と呼ばずに、わざとタタル（^{だつたん}韃靼）とよんだ。それは中華思想の立場では、正統はただひとつしかなく、明朝だけがモンゴル帝国の宗主国元朝の継承者でなければならなかったからである」という（宮脇 1995：6-7）。つまり、明は唐末以来モンゴル帝国時代まで、北アジアの諸民族に対する蔑称としての^{だつたん}韃靼を復活させ、元の後裔をも^{だつたん}韃靼と指すことで、かれらを文明の中心から離れた野蛮な昔の遊牧民のような存在としてあつかおうとしている（宮脇 1995：99-100）。

明以来の漢族文人たちの自己欺瞞に近い宇宙観は清朝のとき地方史記述にも依然としてみられた。序文において「我朝蒙古内属」としながらも、古くから異なる世界に属してきたことを強調しようとしている。

精神的に上記のような華夷秩序に固執する一方、漢族とモンゴルとのあいだに緊密な経済活動がおこなわれていたこともうかがえる。漢族側がモンゴルに家畜の放牧を委託していたことも記されている。なによりも、漢族側はとくにモンゴル人の塩販売に注目しているようだ。モンゴル人による塩販売は税金も課されることなく、利益が大きいと羨望の目でみられている。

塩販売について、モンゴル側にまったく異なる資料が残されている。漢族買弁がオルドスに進出し、塩湖開発を独占し、民族間の対立をもたらしていたことが報告されている (Serruys 1977 : 338 - 353)。先述したように、塩の販売は左宗棠の西北経営においても重要視されていた。清朝末期から中華民国にかけての内モンゴルにおける塩問題の実態を今後の研究課題のひとつとしてのおきたい。

漢族側の観察資料にはモンゴルの文化変容に関する情報を含んでいる。たとえば固定家屋の出現、黍酒の飲用が興味深い。上記記述を根拠にすれば、漢族に近い地域に住むモンゴル族のあいだには、少なくとも 19 世紀末に葦と牛糞、それに泥を材料とした固定建築らしき住居が出現していたことが分かる。黍酒はキビを材料とした低度数の発酵酒で、モンゴル側がそれを製造していたという情報もある (楊 1996 : 671)。

おわりに

以上、清朝時代の地方史『靖辺県史稿』をモンゴル側の資料と比較しながら、部分的に検討した結果、つぎのようなことを抽出することができた。

第一、漢族側に理念上の微妙な変化がみられた。ときの支配者たる満洲清朝への配慮から、清朝時代の北方民族を胡、夷とよぶ現象が公式資料からある程度減少したようにみえる。さきの明代の出来事についてのべるときには、依然としてマイナス用語を使用し、漢族文人の固執ぶりがうかがえる。

第二、敵視していた「套寇」すなわちオルドス・モンゴルの風俗習慣については長期にわたって情報収集していた成果がまとめられている。個々の現象についての描写は正確とまでいかななくても、詳細に観察していたことがあらわれている。

第三、農耕をいとなむ漢族の、土地への執着が前面にでていいる。オルドス地

域への非合法的な入植を「中外和耕」と表現するなど、みずからの入植行為を正当化しようとするねらいがよみとれる。漢族入植者はオルドス・モンゴルの土地で行政組織を確立し、県治を入植地にうつすなど、長期的な占領政策が実施されていた。

中華人民共和国になってから、オルドスと陝西省との境界の大半は、清朝末期に漢族が新たに占領した土地を既成事実としてみとめるとの原則で線引きがおこなわれた。部分的に未確定なところものこされているのは、双方の合意がえられないからである。このように、清朝時代の歴史が現代の民族間関係に大きな遺産をのこしている。

参考文献

丁錫奎編

1970 『靖辺県志稿』(一、二) 台湾：成文出版社。

Erdenebayar

1984 Otoy qosiyun-du örnigsen arad-un duuyuyilang-un ködelgegen, *Soyul-un Teüken Materiyal*,1,p9-49.

Γarudinorbu & Ĵangγabayatur

1997 *Üüsin Notuy Usun*, Öbür Mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

Heissig,W.

1978 *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*,Wiesbaden: Franz steiner verlag gmbh.

宮脇淳子

1995 『最後の遊牧帝国—ジュンガル部の興亡』 東京：講談社。

Mostaert,A.

1956 Carte Mongole des sept bannières des Ordos,in *Erdeni-yin Tobči, Mongolian Chronicle*, Part I,81-124.

Serruys,H.

1977 Five documents regarding salt production in Ordos,*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*,Vol.XL,2,p338-353.

1982 Place names along China's northern frontier,*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*,Vol.XLV,2,p271-283.

Van Hecken,J.

1949 *Les Missions Chez les Mongols*,Peiping : Imprimerie des Lazzaristes.

1960 Une dispute entre deux bannières Mongoles et le pôle joué par les missionnaires catholiques, *Monumenta Serica*, XIX, p276-305.

楊 海英

1994 『オルドス・モンゴル族の社会構造——ヤスの機能とその歴史的変容』(学位請求論文), 総合研究大学院大学。

1996 「オルドス・モンゴル族オーノス部の家系譜」『関西外国語大学研究論集』63.667 - 679。

王 華飛ほか編

1992 『中国西北地市県概況』 蘭州：甘肅人民出版社。

趙爾巽等撰

1976 『清史稿』(第九冊) 北京：中華書局。